つなぎ 42

2013年春号
平成25年4月発行
第12巻第2号
（通巻42号）

地域医療を考えるペガサス情報誌

Special

病診連携の その先へ。

限りなくオープンでありたい。

Pegasus Tsubasa

病院と診療所が機能分担を図り、
互いに連携する「地域医療連携」。
その仕組みは今や全国に広がり、
各地で地域完結型の
医療体制づくりが進んでいる。
そこで、重要となるキーワードは、
オープン(開放)だろう。
診療所の医師と病院の医師が
オープンに語り合える場をつくる。

消化器科部長
原 順一

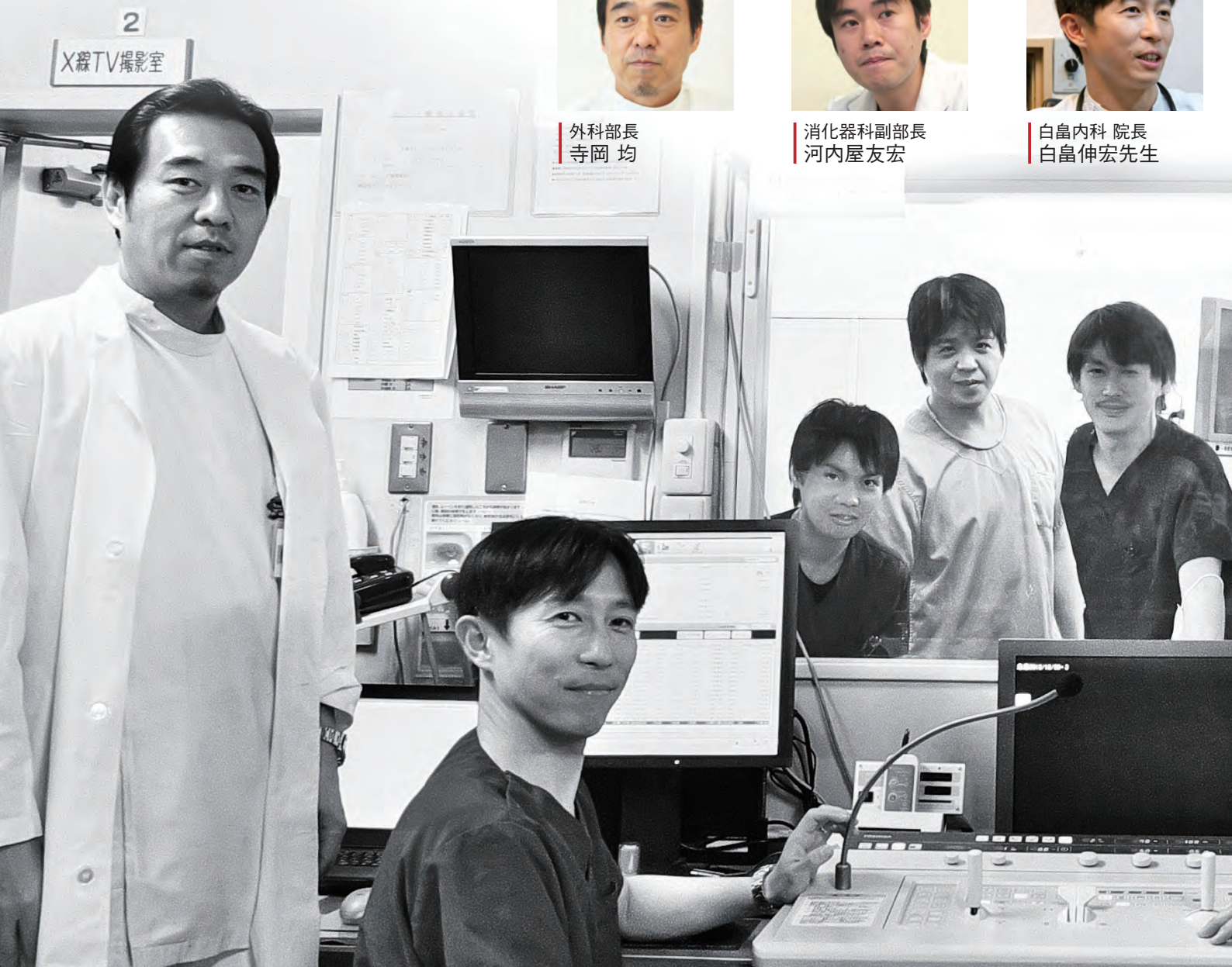
おので整形外科 院長
斧出安弘先生

診療所の医師がいつでも患者さまに
病院を紹介できるように、
病院は常に敷居を低くし、
門戸を開いておく。
また、診療所の医師と病院の医師が
協力して患者さまを治療できるような
環境づくりも大切だ。
馬場記念病院はこうした重要性を
早くから認識し、院内の設備や機能を
地域の医師に積極的に開放してきた。
真の意味で地域に開かれた
病院をめざす馬場記念病院と、
診療所の医師の連携プレイを通じ、
これからの地域医療連携の
あり方を見つめたい。

外科部長
寺岡 均

消化器科副部長
河内屋友宏

白畠内科 院長
白畠伸宏先生



Special

地域の先生とともに。

part 1

馬場記念病院の医療資源を地域の先生に活用していただく。

馬場記念病院は「開放型病院」の認定を受け、病診連携を積極的に進めている。開放型病院とは、登録医である診療所の医師に病院の設備や機能を開放し、共同利用できる体制を整えた病院を指す。診療所の医師の希望があれば、いつでも迎え入れようという体制だ。そんな開放型病院の利点を活用し、密な連携を結ぶ診療所の取り組みを紹介しよう。

「内視鏡検査をさせてほしい」という突然の申し出。

馬場記念病院の設備や機能をオープンに利用できる登録医の先生は、603名にのぼる（平成25年2月末現在）。そのなかの一人、堺市西区鳳西町にある白畠内科の白畠伸宏医師（現・院長）が馬場記念病院の消化器科を訪ねてきたのは5年ほど前だった。

白畠医師は、それまで勤めていた国立病院を辞め、将来、継承することを前提に父の経営する診療所、白畠内科に戻ってきたばかり。まったくの初対面だった馬場記念病院・消化器科の部長医師らを前に、白畠医師は緊張した面持ちで思いをぶつけた。「これまで病院で培ってきた内視鏡検査の技術を活かし、地域に貢献したい。もちろん検査は診療所でもできるが、件数も限られ、内視鏡を用いた治療にも限界がある。ここで内視鏡検査を担当させてもらえないだろうか」。

消化器科部長・原 順一医師は、「正直、最初はどうしようかな、と思いました」と当時を振り返る。「面識もまったくないし、技術のレベルもわからない。ただ、お父さんとの繋がりがあるので、〝NO〟とは言いにくい。不安でしたが、経歴や実績を聞けば、かなり高いレベルで仕事をされていたことがわかりました。また、当時の当院は消化器科としてもまだ医師の数が少なく、検査を担当してくださるのはありがたい申し出でもあります。そこで、週に1回、大腸内視鏡検査をやっていただくことにしました」。

部長の承諾を得た白畠医師は、非常勤医師として大腸内視鏡検査を担当することになった。とはいえ、その腕前を見るまでは、原医師も安心できない。白畠医師は出勤した初日、原医師ら消化器科医師が見守るなか、手慣れた様子で検査をやり遂げた。その腕前を見て、原医師は深く納得したという。「これなら、お任せできると思いました。大腸内視鏡検査は、先端に小型カメラのついた細長い管状の医療機器を肛門から入れて、大腸の状態を詳しく調べる検査です。ポリープや早期がんを見つけた場合は、その場で切除するものですが、下手な人は、内視鏡自体がなかなか奥まで入らないし、入っても時間がかかります。あるいは、患者さまに痛い思いをさせてしまう。白畠先生は検査も切除も、その腕前は確かで、感服しましたね」。

医師同士の意見交換が医療の質を高める。

現在、白畠医師は、毎週水曜日の午後、大腸内視鏡検査を担当している。

水曜日、白畠医師は診療所で午前中の診察を終え、馬場記念病院へ。午後1時までには検査着に着替え、当日検査を受ける患者さまのカルテに目を通し、頭に入れる。多い日で1日7件程度。次から次へと手際良く、検査や治療を

行っていく。そのスピード感は匠の技だ。

腕に自信のある白畠医師だが、決して独断専行はしない。たとえば、内視鏡検査でポリープや早期がんが見つかる。そこで、診断に迷うことがあれば、すぐに電話で原医師を呼び出し、その場でディスカッションして、治療方針を決める。場合によっては外科部長の寺岡 均医師も呼んで、内視鏡で切除すべきか、手術を適用すべきか、検討することもある。外科・内科の垣根を超えて、患者さまにとって最善の治療法を決定することは、馬場記念病院のモットーでもある。

原医師は言う。「診断に迷うことはベテランでもあります。そこで、考えを述べ合うことは、より良い治療法を決定する上で非常に大切なことです」。ディスカッションのメリットは、白畠医師も深く認識している。「診療所で内視鏡検査を行うときは、一人で判断しなければなりません。病院で多くの医師と意見交換することによって、安心して治療できますし、また、勉強させていただく機会にもなっています」。

こうした意見交換は症例検討のカンファレンスでも行われ、白畠医師を含む消化器科の医師全員で情報を共有している。人なつっこい人柄も手伝って、白畠医師はすっかりチームの一員として溶け込んでいるという。

消化器科副部長・河内屋友宏医師は語る。「白畠先生が水曜日の予定検査を担当してくださるので、その分、僕たちは救急患者さまにより早く対応できたり、入院患者さまの治療をしたり、ほかの検査ができますから、とても助かっています。また、先生はカメラの扱いが抜群にうまいので、若手の指導者としても一役買っていただいています」。

河内屋医師は白畠医師の1

「現状に満足したら、成長はありません。自分はもっと内視鏡検査がうまくなるはず。常にそう思って検査に臨んでいます」

週に1度、馬場記念病院で大腸内視鏡検査を担当する白畠医師。
病院に勤務していた頃から培ってきた内視鏡検査の専門技能を余すところなく発揮している。

良き相談相手として交流を深める、
河内屋医師と白畠医師。

歳年下。年齢が近いこともあり、お互いに良き理解者であり、夕食をともにする機会も多いという。そんなときに出る話は、プライベートなことから医療界のさまざまな話題まで多岐にわたる。「僕らからすると、開業している先生の実情はよくわかりません。でも、白畠先生から、レセプト（診療報酬明細書）の苦労などいろいろなお話を聞いて、診療所の先生方の気持ちが少しわかるようになりましたね」と、河内屋医師は言う。

バックアップ体制のある病院で手技を行う安心感。

白畠医師は、馬場記念病院だけで内視鏡検査を行っているわけではない。白畠内科には最新の内視鏡検査機器が整えられ、胃・大腸内視鏡検査や治療を積極的に行っている。従って、専門の消化器（内科）の疾患に関しては、すべて診療所内で診断・検査・治療が完結するかといえば、「そうではない」と白畠医師は言う。「内視鏡検査には、胃・大腸の壁に穴が空いてしまう穿孔や出血など、少なからず合併症のリスクがあります。もしも万が一、何かあったときに、診療所では緊急で外科的手術を行うことができません。その点、病院なら外科もあり、看護師さんをはじめとしたスタッフも多く、バックアップ体制は完璧です。だから、少しでも不安のある症例は、馬場記念病院へ紹介するようにしています」。

大腸内視鏡検査であれば、水曜日に予約を入れ、白畠医師自らが検査・治療を行う。患者さまからすれば、場所が診療所から病院へと移動しただけ。いつもの顔馴染みのかかりつけ医が、いつものようにやさしい言葉をかけながら、検査・治療してくれる。これほど心強いことはないだろう。

「胃内視鏡については、うちで検査して早期がんが見つかったら、治療は馬場記念病院でお願いしています。患部の画像を消化器科の先生に送って、こういう症状なのでお願いします、と言えば、それで話が通じます」と、白畠医師はほほえむ。

病院を辞めても技術の向上をめざしたかった。

そもそも白畠医師は、なぜ、馬場記念病院に飛び込んだのか。

「病院でやってきた内視鏡検査の技術をもっと高めたかった、というのが一番ですね」と白畠医師は言う。

白畠医師が以前勤めていたのは、国立病院の消化器科だった。ちょうど早期胃がんを内視鏡的に切除する内視鏡的粘膜下層剥離術が保険医療の適用を受け、患者さまも増えつつあった。白畠医師はその最新治療における第一人者として、活躍していたのだ。ゆくゆくは実家の診療所を継ぐだろうが、それはまだ先のことだと考えていたという。ところが、父・俊治医師が体調不良で入院することになり、その他の事情もあって、急遽、病院を辞して、戻らねばならなかった。

「後ろ髪を引かれる思い」で第一線を退いた白畠医師は、診療所で父親の診察を手伝い始めたものの、環境のギャップに順応できずにいた。病院では最新の環境で治療や手術をやり続けた。それが、地域に帰れば、どうしても風邪や腹痛といった軽い症例が中心となるからだ。その様子を間近に見ていた父・俊治医師はこんなアドバイスをした。「馬場記念病院さんは病診連携に力を入れていて、うちの診療所もとてもお世話になっている。病院で内視鏡検査を続けたいのであれば、一度、相談してみてはどうだろうか」。

医師にとって、人生の選択肢はいろいろある。最後まで病院勤務を続ける者もいれば、ある程度病院で経験を積んだ後、地域の診療所を開業（継承）して、地域医療のなかで貢献していく者もいる。後者の場合、白畠医師のように、持ち前のスキルを持て余す医師も当然いるだろう。だが、現在では、かかりつけ医をしながら、病院の医療設備を利用して、自らの治療技術を発揮する医師はそれほど多くない。

白畠医師は言う。「僕自身はこういう環境を与えられて、とても幸せだと感じています。但し、病院と診療所の仕事を両立させるには、非常にパワーがいることも事実です。水曜日は午前診から始まり、馬場

診療所においても最新の設備をそろえ、胃・大腸の内視鏡検査を行う白畠医師。
病変部を拡大して観察できる拡大内視鏡もそろえ、早期がんの発見に努めている。

記念病院で検査を行い、終わると急いで診療所に戻り、午後の診察を行っています。朝から夜までノンストップで走り続けるので、体力的にはかなりきついですね」と苦笑する。

地域に根づいて訪問医療に力を注ぐ白畠内科。

ここで、白畠内科についてもう少し詳しく紹介しよう。白畠内科は、父・俊治医師が昭和54年、開院。消化器内科、内科を標榜し、長年にわたって地域のかかりつけ医として貢献してきた。現在は、大先生と若先生という二人体制で診察。メインは消化器内科で、前述したように、最新鋭の内視鏡検査機器のほか、X線TV透視機器、エコー検査機器などを整えている。白畠医師の目標は、「胃がん・大腸がんで亡くなる人を可能な限りゼロにすること」だという。「胃がん、大腸がんは早期に発見できれば治る病気です。当院でも特定健診や大腸がん健診などを行っていますし、予防医療にも力を注いでいます」。白畠医師が手がける内視鏡の検査件数は、年間およそ700件。馬場記念病院で担当している検査件数と合わせると、年間およそ1,000件にのぼる。

白畠内科では内視鏡検査・治療に力を入れる一方で、診療時間外の往診、訪問診療も積極的に行い、寝たきりの高齢者や末期がんで在宅療養している方を支え続けている。白畠医師は語る。「患者さまのなかには、父の代から家族ぐるみでおつきあいのある方が大勢いらっしゃいます。なかには、何年かぶりに来院され、うちの父に、家族の最期を看取ってほしい、という方もいらっしゃいます。地域に根づいた診療所として、訪問診療はとても大切な役割だと考えています」。

訪問診療での看取り。いよいよお別れの時期も間近となると、白畠内科では24時間体制で待機することになる。日中であれば大先生が、深夜は若先生が駆け付ける。「最期を看取ることは、かかりつけ医として責任も重大です。父と二人でやっているからこそ、自信をもってお引き受けできますね」と白畠医師は話す。

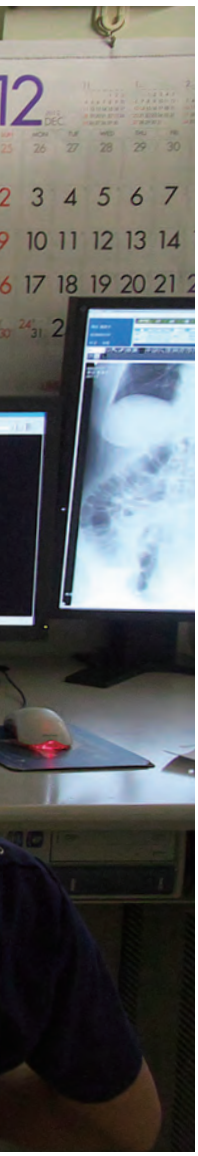
末期がんの患者さまを二人の主治医が一緒に見守っていく。

訪問診療に力を注ぐ白畠内科は、馬場記念病院で治療を終えたがん疾患の患者さまの継続治療を担う診療所としても重要な役割を果たしている。

ここからは、馬場記念病院の外科と白畠内科の連携プレイについて見ていこう。外科部長・寺岡 均医師は語る。「白畠先生には、抗がん剤治療についても、当院のガイドラインに沿ってやっていただいていますし、大きな信頼を寄せています。また、外科医とは違う観点で、患者さまを精神的に支えてくださるのでこちらも助かっています」。

最近の出来事として、こんなことがあったという。「大腸がん末期の高齢の患者さまで、抗がん剤が効かなくなってきた方がいらっしゃいました。本人は副作用のつらい抗がん剤治療は、もう止めたいと考えられたようです。でも、こちらとしては、治療を打ち切りましょう、とは言い出しにくい。少しでも長く生きていただきたいですから。そんなとき、かかりつけ医の白畠先生が〝無理して治療を受けなくても、余生を全うした方がいいんじゃないですか〟とおっしゃったそうです。患者さまはその言葉ですごく納得されて、吹っ切れた明るい表情で私に会いに来られました。〝ありがとうございました。これからは、抗がん剤なしで残った人生を生きていきます〟と。さすがだな、と思いました。かかりつけ医の先生だからこそできるアドバイスだと思います」。

長い療養生活のなかでは、治療を続けることだけが、必ずしも選択肢ではない。つらい思いをして5カ月生きるのか、明るい気持ちで3カ月生きるのか。その決心は、患者さま本人に委ねられる。白畠医師は言う。「抗がん剤治療を止めるのも一つの選択だよ、と言うのがかかりつけ医の役目だと思っています。とくに、発症前の元気な頃からおつきあいしている患者さまはなおさらそ



「部長の原先生とも、いつでも気軽に話ができます。いろいろ勉強させてもらっています」と、白畠医師。

「白畠先生とは垣根なく、なんでも話し合える」と、外科の寺岡医師は言う。

うです。父はさらに超越していて、〝そろそろ身辺整理しておいた方がいい〟というようなことを平気で言います。以前は冷たい物言いだと思いましたが、今はよくわかります。人は誰でも一度は死ぬわけですからね。どうやって生きるのか、死ぬのか、迷いのなかで、治療を止めてもいいことを伝えると、患者さまは肩の荷を下ろされるようです」。

急性期病院の治療は、どちらかと言えば、走り続ける医療だ。しかし、診療所の治療は、ときに立ち止まり、患者さまとともに治療法を見つめ直すこともできる。病院の医師とかかりつけ医の医師、二人の主治医が協力して患者さまを支える大切さを、改めて実感させられるエピソードといえるだろう。

救急の疾患や、手術の必要な症例は馬場記念病院へ。

白畠内科では、手術の必要ながん、胆のう炎、虫垂炎（盲腸）などの患者さまを、馬場記念病院の外科に紹介している。「寺岡先生には、たくさんの患者さまを治療していただいています。僕自身、寺岡先生をはじめ、外科の先生方をよくわかっているので、安心して紹介できますね」と言う。

そういうケースで、さらに役立っているのは、毎週水曜日の内視鏡検査日だ。白畠医師は、検査前後のわずかな時間をやりくりして、入院している患者さまの顔をのぞきに病棟へ足を運ぶ。白畠医師の顔を見ると、どの患者さまも安堵した表情を見せ、喜んでくださるという。

寺岡医師は、そんな白畠医師の対応に大きな信頼を寄せる。「たとえば、手術はうまくいっても、その後、肺炎などを起こされるケースも稀にあります。そんなときも、白畠先生は患者さまを励まし、精神的に支え、患者さまやご家族にも丁寧に説明してくださいます。白畠先生のおかげで、こちらも患者さまやご家族との信頼関係がスムーズに構築できます」。

24時間体制で患者さまを受け入れる。

白畠医師は、病院の紹介先として馬場記念病院をほぼ第

内視鏡の専門医であると同時に、診療所では総合医に徹する。
「患者さまを全般的に診て、病気を見逃さないことがかかりつけ医の役割です」と白畠医師は語る。

「自分がもっている技術は、出し惜しみすることなく後輩に伝えていきたい」。
白畠医師は機会を見つけては、若手医師にもていねいにアドバイスしている。

一選択としている。その理由は、立地が近いこともあるだろう。しかし、それだけではなく、「とにかく困っているときに、いつでも診てもらえるから」だと言う。

「たとえば、昨年末、鼻血が止まらない患者さまがいました。当院では専門外なので、処置ができない。総合的に診療科をもつ大きな病院へ治療をお願いしたら、いま耳鼻科の専門医が不在なので診られないと言うんです。そこで、馬場記念病院さんへお願いしたら、どうぞ来てください、と。ここなんですね、本当にありがたいと思える理由は…。医師の経験をいくら積んでも、わからないこと、できないことはすごくたくさんあります。本来、病名をつけられないまま自分の患者さまに病院を紹介するのは、恥ずかしいことです。医師としてのプライドもあります。でも、患者さまを第一に考えれば、そんなことは言っていられません。とにかく困っている。それを助けてくれるのが、馬場記念病院です。これは、消化器科や外科に限らず、循環器科、脳神経外科などみんなそうですね」。

敷居を低くして、常に登録医の先生方をサポートする。その姿勢は、馬場記念病院の医師や職員全員が徹底して心がけていることでもある。

「馬場記念病院は、先生方も職員の皆さんもフットワークが軽い。行動が先。救急病院という自覚をもって、忙しいとかいう言い訳などなく、当たり前に診てくださる。プロ意識が高い〝大人の病院〟だと思います。すごくリスペクトできますね」。

こうした地域の先生の期待に応えるために、馬場記念病院もまた常に努力を重ねている。今回取り上げた消化器科・外科に関して言えば、平成23年末、消化器科と外科がより一体化した治療体制を推進していくために、消化器センターとして始動。一刻を争う急性腹症や吐血・下血、腹部外傷などの急性疾患に対しては、24時間対応で迅速な診断と適切な治療を行っている。とくに内視鏡検査・治療については、必要であれば、深夜であってもオンコールで担当の看護師や臨床工学技士も駆けつけ、医師が速やかに検査・治療ができる体制を整えている。また、消化器センター内にある化学療法室は、患者さまにリラック

◀内視鏡検査画像を見て、ポリープの処置を確認する白畠医師。

▲消化器科のカンファレンスには、白畠医師も積極的に参加する。

スして点滴治療を受けていただける体制も完備している。

寺岡医師は言う。「医師の数も増え、手術件数も増えています。24時間体制で断ることなく、いつでも充分な治療をさせていただいています。消化器科と外科はもちろん、地域の先生も含めて、垣根なく患者さまのために動こう、という気持ちを共有できていますし、そこが当センターの良さだと思います」。

これからの開放型病院をめざして。

診療所で診察する傍ら、馬場記念病院の検査設備を用いて、内視鏡検査を行う白畠医師。ここまで深く病診連携を結ぶのは珍しいケースといえる。

しかし、それに近いカタチで、馬場記念病院をうまく利用している地域の医師は多い。たとえば、馬場記念病院の放射線科の医師に、診療所で撮影したX線フィルムの読影を依頼する先生もいる。診療所の医師がたった一人で判断に思案するとき、病院の高度な画像診断機能を利用することで、より的確な診断結果を患者さまに伝えることができるからだ。また、院内で開催する「症例検討の勉強会」には、広く地域の医師に参加を呼びかけている。そうした機会を利用し、新たな医療知識を得ている先生も多い。さらに地域医療支援室では、診療材料・医療機器の共同購入も行っている。そのほか、リハビリテーションスタッフが診療所に出向き、その診療所に通う個々の患者さまに応じた、リハビリテーションについて職員に指導したり、管理栄養士が診療所に赴き、患者さまに食生活のアドバイスを行うなどといった支援にも力を注いでいる。

白畠医師は言う。「診療所の医師は、みんな一人で頑張っています。そこで困ったとき、助けてほしいとき、気軽に相談できる病院が近くにあると、どの診療所もとても助かると思いますね」。

診療所の医師が、気軽に病院機能を活用できる。あるいは、病院から職員が診療所へ出向いてサポートする。地道ではあるが、そうした連携の積み重ねが、地域医療の絆を深め、患者さまへのより良い医療サービス提供に繋がっていくことは間違いないだろう。

Eye's of Pegasus

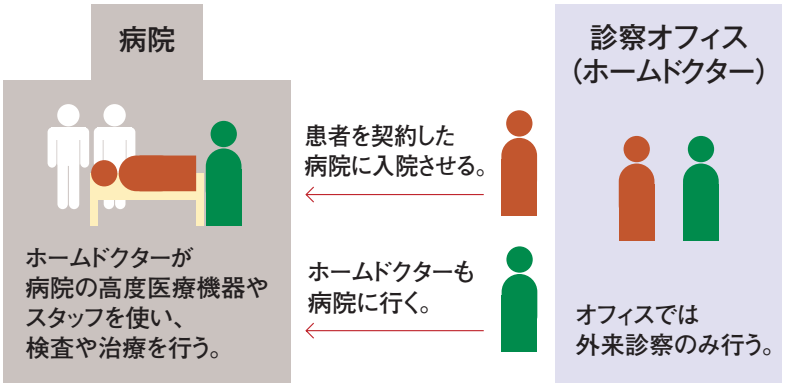
海外の医療連携「オープンシステム」

日本と諸外国では、医療の提供体制が大きく異なる。日本でいう「開放型病院」は、診療所の先生方に病院の設備や機能を利用していただくものだが、アメリカ、オーストラリア、フランスなどでは、そもそも病院の機能すべてを、外部の個人医師に開放しており、これを「オープンシステム」という。

アメリカを例に上げると、日本では病院の外来医師が診察して、患者さまの入院の必要性を判断するが、アメリカの病院には、いわゆる外来機能はないことが多い。町中にオフィスを構えるホームドクター（かかりつけ医）が、患者さまを診察し、入院・手術が必要と判断した場合は、自分が契約している病院に入院手続きを取る。その上で、そのホームドクター自身が病院に出かけ、診察を行う。専門医の診察が必要な場合も、ホームドクター自らが専門医に依頼するし、ホームドクターが外科医であれば、そのドクター自身が病院で手術を行う。

こうしたオープンシステムのメリットの一つに、病院の常勤医を減らせることがある。実際、アメリカの病院の常勤医師は、救急医や放射線科医など一部に限られていることが多い。その利点を活かすべく、日本でも医師不足の深刻な産科において、オープンシステムが一部導入されつつある。産科オープンシステムは、妊婦健診は診療所で受診、分娩の際は病院に入院し、診療所の医師が病院に来て分娩を行うものだ。また、妊娠36週までの妊婦健診は診療所で受診し、以降は病院で受診。分娩は病院の医師が行うセミオープンシステムもある。これらのシステムは妊婦の利便性や安全性を保ちながら、医師不足の解消に繋がる取り組みとして、今後の発展が期待されている。

アメリカ型のオープンシステムの一例



Special

地域の先生とともに。 part 2

病院の医師とかかりつけ医が一緒に手術を行う。

膝関節手術の技術を開業後も発揮するために。

地域の医師に開放型病院のメリットを活用していただいているケースとして、もう一つ、「おので整形外科」と馬場記念病院・整形外科の連携を紹介したい。

おので整形外科は平成12年、南海本線堺駅にほど近い立地に開院した。開院するまで、院長の斧出安弘医師は、膝の関節手術を得意とし、大学病院などで豊富な手術実績を積んできた。開院当初は、その腕前を見込んで、多くの患者さまが診療所に足を運んだ。その期待に応えるべく、斧出医師は馬場記念病院の整形外科に、一緒に手術をさせてほしいと申し出た。答えはもちろん「大歓迎です」だ。

当初、斧出医師は関節手術の必要な患者さまに馬場記念病院を紹介し、斧出医師自らが執刀医となり、変形性膝関節症や関節リウマチによって変形した膝関節を、人工膝関節に置き換える手術などを行っていた。「勤務医として何度も行ってきた手術ですから、最初の頃は難なくできました。でも、診療所の生活が長くなってくると、徐々に手術の勘が鈍ってくるものなんですね。それに、医学も進歩しています。そこで、最近は手術のサポートに入るカタチで、手術室に入らせてもらっています」。

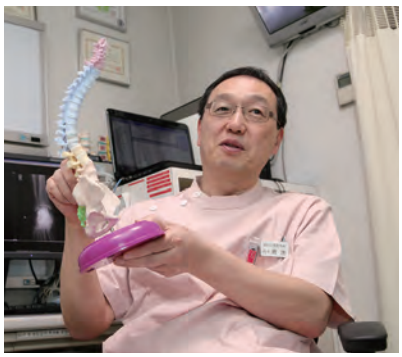
サポートに入るスタイルでも、斧出医師が手術室に入ることは大きな意義があるという。「何よりも、患者さまがとても安心してくださいますね。事前に手術について詳しくご説明できますし、執刀してくださる医師についても、その人柄や力量を紹介できます。術後もときどき、ベッドサイドまで足を運びます。そういうことのすべてが、患者さまの安心に繋がっていると感じています」と斧出医師は語る。

患者さまとのフレンドリーな関係が信頼をつくる。

斧出医師の診察スタイルは、とてもフレンドリーで温かい。「手術した方がええよ」「大丈夫やから…」――患者さまの話をじっくり聞いた上で、関西弁でざっくばらんに話しかけ、ときに笑いを誘いながら、不安な心を解きほぐしていく。その朗らかな人柄にひかれ、おので整形外科に通う患者さまは年齢層も実に幅広い。膝痛や腰痛に悩む高齢者からクラブ活動でケガをした中高生、

さらに、陸上競技、サッカー、バレーボールなど、さまざまな分野で活躍するトップアスリートたちまで多岐に及ぶ。

そんな斧出医師のもとに長年通い、薬物療法や理学療法などの保存的治療を受けてきた患者さまが、いよいよ「手術しなくては治らない」という事態になったとき、紹介状一枚を渡され、まったく知らない病院へ行くのは、とても心細いことだろう。「馬場記念病院やったら、僕が行けるから…」というと、手術に踏み切れなかった患者さまも決心されますね」と斧出医師は言う。かかりつけ医への信頼が、手術に立ち向かう勇気を与えてくれるのだろう。



飾らない人柄で地域の患者さまから信望を集める、斧出医師。

もちろん、外傷や脊椎の疾患など、斧出医師が手術室に入らず、病院の医師に任せるケースもたくさんある。「そういうとき、紹介した側としては、手術が予定どおり終了したか、その後の経過はどうか、やはり気になります。退院したときに報告書をいただきますが、もう少し早いタイミングで、手術後の画像一枚でもメールで送ってくださるとうれしく思います。先生方もお忙しいとは思いますが、そういう速やかな連携ができれば、さらにありがたいですね」と斧出医師は語る。

病院における共同指導の課題は何か。

おので整形外科は、大阪市立大学医学部附属病院の臨床研修協力施設として、研修医を受け入れている。研修期間にタイミング良く、馬場記念病院の手術室に入る機会があれば、研修医も連れていくという。「こういうスタイルで病診連携できることを知ってもらいたい。将来、若い先生が開業するときの参考にしてほしいと思います」と、斧出医師は語る。

病院の設備を使って診療所の先生が手術するのは、欧米諸国の「オープンシステム」に近いスタイルと言える。今後の課題はどんなところにあるだろうか。「問題は、何かトラブルがあったときに保証がないことですね。勤務医であれば、トラブルがあっても病院がバックアップします。でも、診療所の医師が病院で手術してトラブルを起こしたら、その適用範囲にはなりません。そういう保証システムが完備されれば、腕に自信のある医師はもっと病院を利用できるようになるのではないでしょうか」。

診療所の医師が病院で手術するオープンシステムは、日本では産科を中心に発展が期待されている。診療所の医師の「安心」を担保にできれば、この仕組みは日本でもっと広がっていくのではないだろうか。それは、患者さまにとって安心の手術を提供することであり、診療所の医師の技量を活かし、勤務医不足をカバーすることにも繋がっていく。馬場記念病院では、万一の医療事故の際の責任分担などを予め定めた上で、これからも積極的に地域の先生方を迎えていこうと考えている。

「手術の腕に自信のある医師は、もっと病院に入っていくべきだと思います。病院の医師不足解消にも役立ちますからね」

おので整形外科を開院して13年。手術する機会は減ったが、地域の患者さまとの信頼関係はいっそう強固になった。

これからの地域の病診連携を語る。

病院と診療所の連携を深めていく。すべては、患者さまのために。

馬場記念病院 院長（社会医療法人ペガサス 理事長）
馬場武彦

地域医療支援病院として病診連携ネットワークを推進する。

馬場記念病院の地域医療連携の取り組みは、開設当初からである。それは、ペガサスの創始者である故・馬場 満医師の方針であり、また、地域医療機関との絆の深さにも由来する。そして、国による医療提供体制の変革が始まってからは、より力を注ぎ、平成10年、開放型病院の指定を受けたのに続き、平成15年、大阪府で初めて地域医療支援病院の承認を得て、地域医療のネットワーク化を強力に推進してきた。このように早くから地域医療連携をめざした狙いはどこにあるのか。院長の馬場武彦に話を聞いた。

「施設完結型の医療ではなく、地域完結型の医療をめざすというのは国の方針でもあり、ここ十数年の間に猛スピードで改革が進んできたと思います。そのなかで私たちが一番大切にしてきたことは、患者さまに常に最適な医療を提供することでした。医療を提供する場所が、診療所、病院と変わっても、医療の質を下げることなく、連続性を保ち続けなければなりません。そのために、一人でも多くの診療所の先生と協力関係を結ぶことが大切だと考え、連携強化に努めてきたのです」と、馬場は言う。

さらに、病診連携のあり方については、「日常的な健康管理を担う診療所と、高度な専門医療を担う病院が深く連携することは、地域医療の効率化に繋がります。お互いに役割分担しながら、双方に足りない部分をカバーし合う姿勢が重要だと考えています」と話す。また、馬場がとくに重視している分野は、在宅医療だという。「今後、高齢者はさらに増え、在宅医療を支える診療所の先生の負担も増大していきます。そうした先生方をバックアップするために、急変時に速やかに患者さまを受け入れるなど、しっかり連携していきたいと考えています」。

病診連携を結ぶ真の狙いを理解していただきたい。

登録医の医師と「紹介・逆紹介」の関係を結ぶことで、地域医療を支えている馬場記念病院。今回の特集では、その枠組みを超えて、より深く連携する病診連携の事例を紹介した。そのような緊密な連携について、院長の馬場武彦はどのように考えているだろうか。

「白畠先生のように、診療所と病院の両方のステージで活躍されるケースは、一般的に見

ても稀だと思います。また、斧出先生のように共同で手術するケースも、まだそれほど多くはありません。そうしたなか、深く連携を結ぶことができているのは、当院にとってとてもありがたいことだと考えています。診療所の先生が当院の機能を有効に活用することは、患者さまにとって大きな安心をもたらします。今後も、診療所の先生に気軽に利用していただけるよう、敷居を低くして、門戸を開いていきたいと思います」。

開放型病院は、厚生労働省がすすめる地域医療政策の一つでもある。その背景には、医師や看護師の人数、病床数をはじめとした地域の医療資源が限られている事情がある。地域の医療機関が施設の垣根を超えて歩み寄り、協力していかなくては、夜間の救急医療など、地域が必要とする医療を適切に提供することはできない。

「紹介・逆紹介という仕組みは、患者さまにも広く浸透してきたと思います。ただ、それだけでなく、病診連携の真の狙い、すなわち、患者さまが必要とする医療を提供するために連携が不可欠であることを、ご理解いただきたいと願っています。患者さまの理解と協力なくしては、地域医療連携は進んでいきませんから」。

地域医療連携の主役は患者さまであり、連携の推進を後押しするのもまた患者さまなのである。馬場は、患者さまを中心とした地域医療ネットワークシステムの構築を、今後も推し進めていく考えだ。

Second edition

地域医療を支える診療所。皆さまを最適な医療へと繋ぐ。

ペガサスは、地域の診療所と連携を図っています。診療所は、地域の皆さまにとって、医療を受ける「最初の窓口」。丁寧な診察による適切な診断・治療を行うとともに、専門的な検査・治療が必要と判断した際には、患者さまに病院を紹介してくださるなど、皆さまにとっては一番身近な存在であり、「かかりつけ医」として、健康状態を総合的に管理してくださいます。第二特集では、こうした診療所をご紹介しています。（※診療所はアイウエオ順で掲載）

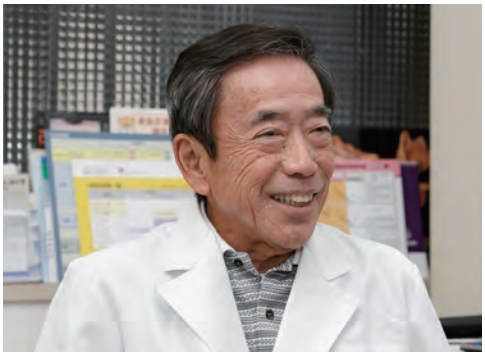
地域の患者さんを支える医療人として、これからも医療の質と安全を守り続ける。

「適切な医療を提供する」。医師として貫くその思いが、日々の診療を支えている。

真摯に向き合う診療が、患者さんの信頼へ繋がる。

塩田内科医院の塩田正明院長。以前は泉大津市立病院に勤務していたが、患者さん一人ひとりをじっくり診たいと思い、昭和54年、この診療所を開いた。すでに開業から30年余り。当時幼かった患者さんも今では大人になり、自分の子どもと一緒に診察室を訪れることも増えてきた。

塩田院長が、診療方針として心がけていることがある。それは、「前に受診したときの患者さんの訴えを、必ず覚えているということです」。診療科が内科ということもあり、慢性化した病気の患者さんが多く訪れるため、前回の患者さんの訴えを覚えていることによって、医療の連続性を大切にし、不測の事態をできるだけ予防する。「この姿勢が、患者さんからの信頼に繋がっているかなと思います」と、塩田院長は笑う。



近年、「かかりつけ医」が求められる前から、地域のかかりつけ医として幅広く診療していた塩田院長。一方では「診る『守備範囲』を狭めている」とも言い切る。それはなぜか。「患者さんを総合的に診た上で、診療所で治療がすむ場合は、ここで診ます。一方で高度な検査の必要性や疑わしい症状がある場合は、病院へ紹介します。この一連の流れを速やかに行うことが、患者さんの医療の安全と質を守ることに繋がる、と私は思います」。地域医療のゲートキーパー的役割を担うことで、患者さんに適切な医療を提供することができる。かかりつけ医としての診療を支え続けているのは、他でもない「患者さんのため」という、塩田院長の思いにあった。

医師同士の顔の繋がりが、地域医療を支え続ける。

平成25年3月まで、泉大津市医師会の会長を務めた、塩田院長。地域の医療を考えたときに、医師会として、各診療所の先生たちと病院の先生たちが、話し合いの場が持ちやすいように働きかけをした。まずは、病院との懇話会を設けて、病院の先生たちと顔が繋がるように努めた。また、病院主催の勉強会やカンファレンスにも参加することで、先生同士の繋がりも広がるように努力した。今後の取り組みとしては、病院との連携に限らず「診診連携」を図るためにも、医師会員同士のチームプレイを活かしていってほしいと語った。

社会医療法人ペガサスが、地域の基幹病院である泉大津市立病院の経営に携わること

については、「スムーズな病診連携を図るためには、病院における医療の質と安全が向上することが前提です。病院機能が強化されることは、地域や患者さんのためになること。病院にとっても地域にとっても大変良いと思います」と期待が大きい。

医師会長の任を終えた今も、一人の医師として、地域の患者さんの医療を支えるために、塩田院長の日々は続く。

塩田内科医院
院長：塩田正明
所在地：大阪府泉大津市東豊中町 1-12-6
診療科目：内科
TEL：0725-45-1391

子どもたちの心身を診る医師として。地域医療を結ぶ医療人として。

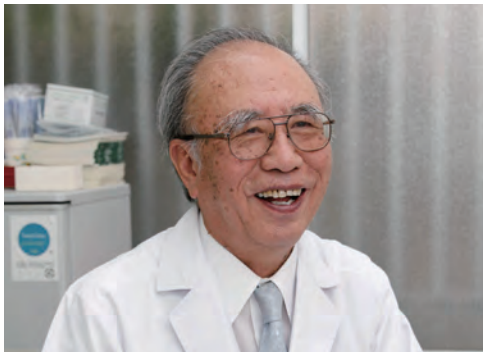
言葉にできない、子どもたちの気持ちを汲み取っていく。

わずかなサインを見逃さない、聞き逃さない。

昭和53年に開業した樋上小児科。同院の樋上 忍院長の専門は小児神経学だ。小児一般や成人のかかりつけ医としての診療とともに、さまざまな神経症の子どもの診療を行っている。

なかでも、ストレスに起因する心身症を診るにあたっては、「原因が何なのか、お母さんから話を引き出すことが大事です」と樋上院長は語る。成人の患者さまとは違い、子どもは自分で症状を説明することができない。その気持ちを汲み取り問題を探り当てなければならないところに、小児を対象とする神経科領域の難しさがある。その際、診察に訪れた保護者の何気ない言葉が鍵となることも多い。ある少年のケースでは、その生活ぶりを母親に問うなかで、「この子、私たち夫婦の部屋の前で寝るんです」という一言で、原因が愛情不足だと思い至ったという。

「親御さんには、とにかくスキンシップしてあげてほしいと言っていますが、それを聞いただけで子どもが泣くんです。今は共働きの方が多いですし、愛情を充分受け取れていない子どもが多いですから」。



緩やかな連携の下で、繋がっていく堺市の医療。

樋上院長は平成24年3月、堺市医師会長を退いた。かつて医師会理事になった昭和59年を、今、こう振り返る。「まだ地域連携という考え方が浸透していなかったので、まずは各医療機関の先生同士、お互いの機能を把握することが必要だと思い、病院・診療所を紹介するマップを作りました。これは今も更新し続けています」。各医療機関に協力を求め、集めた情報を盛り込んだマップの作成には大変な労苦があったはずだが、樋上院長は「当時の植松治雄会長の先見の明です」と謙虚に語る。

昭和61年には当時の植松会長の下で44病院の病院部会を立ち上げ、総会を通じ病診間の意思疎通に努めた。平成14年の会長就任後も病院との関係づくりに心血を注ぎ続ける。同20年、医師会主導の下、2カ月ごとの主要病院長会議を始め、地域連携パス委員会も発足。現在は脳卒中など13の地域連携パスが機能し、堺市の医療レベルを底上げする一助ともなった。

これまでの地域連携の仕組みづくりについて、樋上院長は「緩やかな連携が上手く働いています」と穏やかに語るが、方針の異なる各医療機関を繋ぐ道程は決して平坦ではなかったはずだ。その長年にわたる尽力、そして、地域医療を支える一医師としての積み重ねが、平成23年秋の旭日双光章叙勲に結び付いた。

最後に、堺市の医療への今後の要望を訊いた。「医師会には連携の方針をさらに充実させてほしいですね。あと、今後ますます重要になる在宅医療。診療所の先生方に、診診・病診の連携を進めてもらえれば」。樋上院長は地域医療の未来に期待を寄せる。

医療法人　樋上小児科
院長：樋上 忍
所在地：大阪府堺市西区鳳東町 2-164-5
診療科目：小児科
TEL：072-273-7100

つばさ 42
2013年春号
平成25年4月発行第12巻第2号
（通巻42号）
地域医療を考えるペガサス情報誌

発行人　馬場武彦
編集長　立永浩一
編集　ペガサス広報委員会　編集グループ
発行　HIPコーポレーション
社会医療法人ペガサス　〒592-8555　大阪府堺市西区浜寺船尾町東 4-244
TEL 072-265-5558　http://www.pegasus.or.jp/

つばさ 42
地域医療を考えるペガサス情報誌

今回の『つばさ』では、
地域連携のこれからのカタチとして、
診療所の医師が地域の病院を活用し、自ら検査や手術を行うという、
全国的にまだ数少ない例をご紹介しました。
これは、馬場記念病院の機能・能力を、
当院の医師だけではなく、地域全体の医師が活用すること。
私たちの町が有する、一人ひとりの医師が持つ専門能力=ソフトと、
それを活かす施設・設備=ハードを最大限に使い、
地域の皆さまへのより良い医療のご提供へと繋いでいます。

これまで馬場記念病院は、地域医療支援病院として、
地域の診療所との連携に大きな力を注いできました。
また一方、地域の診療所からも、大きな支援を受けてきました。
こうした双方からの一歩、二歩、三歩という歩みが、
新たな連携のカタチに結実したものと考えます。
その根幹は、診療所の医師も、私たちペガサスの医師も同じ。
「地域の皆さまのために」という思いです。
今後は、さらに新しい連携のカタチが誕生することと思います。
皆さまには、限りある地域の医療資産を、
いかに有効に、そして、効率的に活用するかの視点で、
私たち医療者とともに考え、ご理解いただきたく思います。

社会医療法人ペガサス　理事長　馬場武彦

Pegasus
社会医療法人
ペガサス